

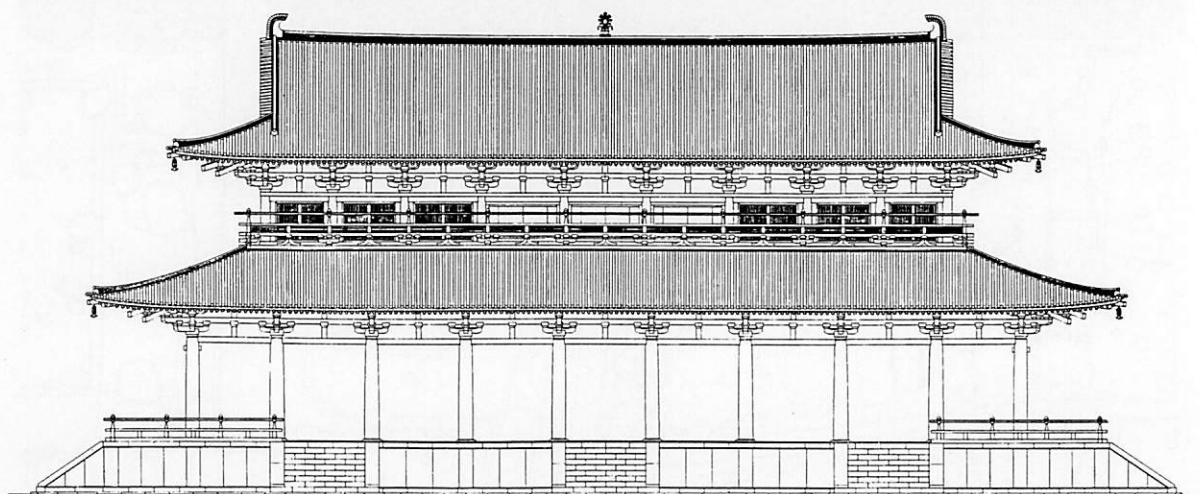
平城宮第一次大極殿院復原模型の製作

平城宮跡発掘調査部

1989年度からはじまった特別研究「平城宮第一次大極殿院地区の復原整備のための基礎調査」の一環として、本年度は大極殿院全体の地形と建築を復原した100分の1スケールの模型を設計・製作した。昨年度の復原設計部会の検討結果に基づき、第Ⅰ－Ⅱ期の大極殿・後殿・閤門・東楼・築地回廊・軒廊・地形の設計を分担して進めるとともに、設計過程のいくつかの段階において、復原設計部会もしくは小部会を開催し、細部の修正をはかった。設計は、大極殿・後殿・閤門を松田敏行（松田社寺企画）、東楼と築地回廊を浅川滋男、軒廊を長尾充、地形を内田和伸が担当し、全体を鈴木嘉吉が監修した。各建物の復原の考え方について、『平城宮発掘調査報告Ⅺ』（1982年、以下「『平城』Ⅺ」と略称）の結論と対比させながら以下に概説しておく。なお設計寸法は、1尺＝29.54cmとした。

大極殿 SB7200 遺構としては、基壇南北両面および階段の地覆抜き跡の一部が残るにすぎない。『平城』Ⅺでは、基壇の南北幅が29.5m（100尺）に復原されうることと、階段幅5.0m（17尺）が桁行柱間に相当することから、基壇規模を東西180尺×南北100尺、建物を桁行9間（17尺等間）、梁間4間（17尺＋18尺×2＋17尺）の四面庇付平面に復原している。ところが、1992年4月の第1回復原設計部会において、藤原宮大極殿が平城宮第一次大極殿を経由して恭仁宮大極殿に移建されたという小沢毅氏の新見解が発表され、SB7200の平面に若干の修正が加えられた。小沢氏の考えに従うと、柱位置および基壇範囲の確定している恭仁宮大極殿と平城宮第一次大極殿は同規模であり、庇の出は4面とも15尺、基壇は東西181尺×南北98尺に復原される（詳細は「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』1993年3月を参照）。構造形式の復原にあたっては、まず単層か重層かという問題があるが、『本朝文粹』巻九に平安宮大極殿を「重軒」と表現する記載があることなどから（『平城』Ⅺ p.180参照）、重層と推定した。また、屋根が入母屋造か寄棟造かという問題もあるが、昨年来、入母屋案と寄棟案を比較検討してきた結果、主として意匠上の理由から、今回の復原模型では入母屋案を採用することにした（寄棟案を否定するものではない）。なお、重層の平面は桁行9間（12尺＋13尺＋14尺＋15尺×3＋14尺＋13尺＋12尺）、梁間3間（12尺＋16尺＋12尺）と考えた。

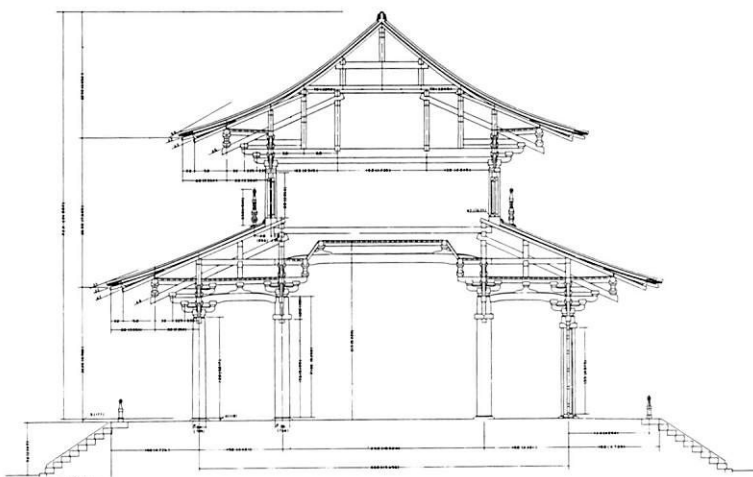
基壇高は、階段の出などから9.3尺に復原した。また、平面の新復原案によると、基壇の出は16尺となる。この場合、軒の出は17尺以上が望ましかろうが、構造上の限界から、初層・重層とも16尺にとどめた。軒は二軒で、組物は薬師寺東塔スタイルの三手先とした。このほか、高欄は法隆寺金堂、身



第一次大極殿正面図 1:400

舎天井は唐招提寺金堂、臺股は唐招提寺講堂の細部にならった。柱間装置は『年中行事絵巻』にみえる大極殿の描写を尊重して、正面全面を開放とした。

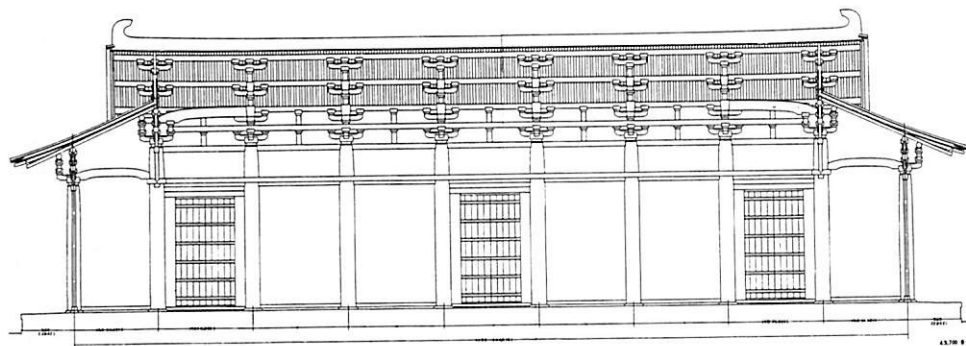
後殿 SB8120 北側の軒廊にとりつく入隅部分および基壇西側の雨落溝1.4m分しか遺構が残っていない。そこで、まず平城宮第二次大極殿院の平面をみると、大極殿と後殿の建物桁行柱間および基壇の東西長を同寸法にそろえている。第一次大極殿院



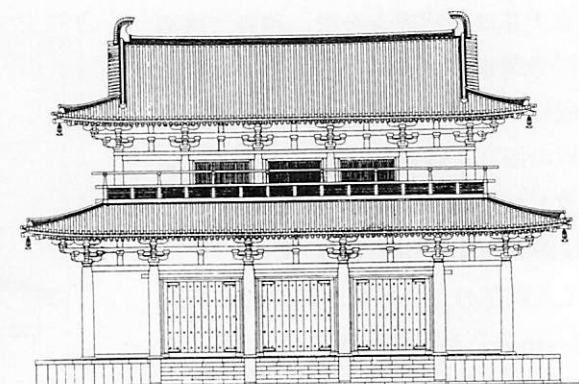
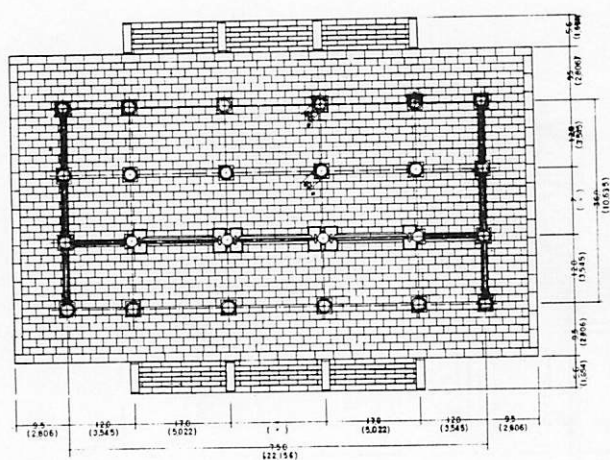
第一次大極殿梁行断面図 1:400

においても、基壇西側の雨落溝の位置からみて、後殿と大極殿の桁行規模が同じであった可能性がある。梁行方向については規模は不明だが、かりに第二次大極殿院後殿と等しく梁間2間だとすると、後殿と大極殿との距離が開きすぎる点に多少の難がある。今回の復原では『平城』XIの見解を踏襲し、大極殿と桁行寸法をそろえた7間4面の単層建物と考えた。ただし、梁行方向については、身舎の柱間を『平城』XIよりも1尺縮めて17尺とした。この場合、平面は桁行9間(15尺+17尺×7+15尺)、梁間4間(15尺+17尺×2+15尺)となる。また、西雨落溝との関係から基壇の出は9.6尺に復原される。このため、軒は二軒で出を10.5尺とし、組物は東大寺法華堂式の出組を採用した。このほか臺股は、唐招提寺金堂の様式にならった。柱間装置については、『年中行事絵巻』にみえる小安殿の表現を参照し、大極殿とおなじく前面開放とした。

閤門 SB7801 柱位置を示す礎石据付け遺構は残らず、基壇の掘込み地業、基壇北縁の礫敷雨落溝および地覆抜取跡、北面階段の痕跡しかみつからない。『平城』XIでは基壇の規模を東西約28m(94尺)×南北約16.2m(55尺)と推定し、桁行5間(15尺+17尺×3+15尺)×梁間2間(20尺等間)の単層切妻造建物に復原している。しかし『続日本紀』には、元明天皇が和銅三年正月十六日に「重閤門に御して宴を文武百官並びに隼人・蝦夷に賜ひ、諸方の楽を奏す……」との記載があり、ここにいう「重閤門」が第一次大極殿院の閤門である可能性が大きい。また、平面についても、『平城』XIでは梁間を2間とみなし、その柱間寸法を20尺とするところに構造上の難がある。以上から、この閤門は、法隆寺中門式の梁間3間の重層門に復原するのが妥当であり、平面は初層が桁行5間[12尺+17尺×3+12尺]×梁間3間(12尺等間)、重層が桁行5間(12尺+13尺×3+12尺)×梁間2間(12尺等間)と推定し、屋根は入母屋造とした。この場合、基壇の出は四周とも9.5尺となるから、軒の出は10.5尺で二軒に復原し、組物は二手先とした。ところが、周知のように、奈良時代の現存建物に二手先組物を使



第一次大極殿院後殿
桁行断面図 1:400



第一次大極殿院閤門正面図 1:400

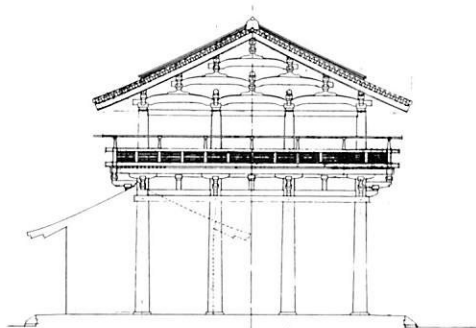
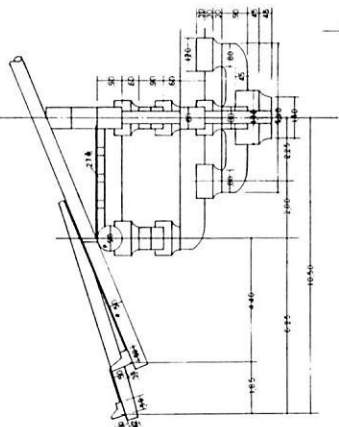
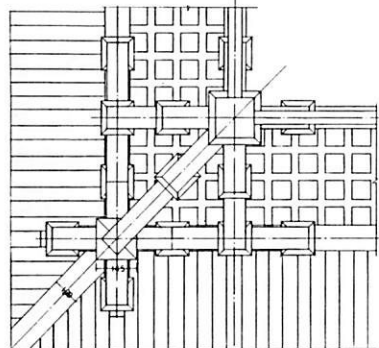
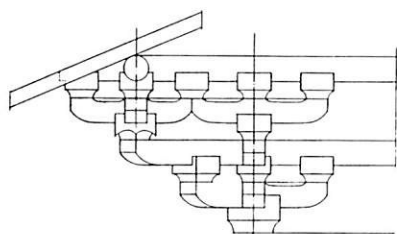
第一次大極殿院閤門平面図 1:400

う遺構は残っていない。そこで、西安の慈恩寺大雁塔帽石に線刻された仏殿図の細部を参照して復原を試みた。この場合、とくに隅の納まりがユニークなものとなる。桁をうける5つの巻斗が、わずかに長さの異なる2つの肘木にのるのだが、この2つの肘木を一本造出しとするのである。このほか、扉まわりや高欄などは、ほぼ復原朱雀門の細部に準じている。

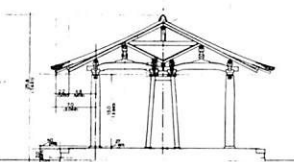
東楼 SB7802 柱位置の確定している唯一の建築遺構である。桁行5間(15.5尺等間)×梁間3間(13尺等間)の総柱式東西棟で、側柱を掘立柱、内部の柱を礎石建とするところに大きな特徴がある。また、深さ2.5m以上もある掘立柱穴の一つからは、根がらみを伴う径75cmの柱根が出土しており、楼阁建築の通柱として用いられた可能性が大きい。一方、内側の礎石建柱は2階の床を支える束柱とみればよいだろう。『平城』XIでは、以上の出土データから、2階に高欄をめぐるせた楼阁建築に復原し、屋根を入母屋造として、内部に長さ39尺の大虹梁を架けている。しかしながら、梁間3間の通柱式という遺構の特徴を素直に尊重するならば、切妻造の楼阁に復原するほうが無難だろう。この場合、小屋組および妻飾りが大きな問題となる。梁間が3間と広がる場合、2重虹梁臺股形式では適当な屋根勾配が確保できないし、叉首構造では大極殿関連施設の意匠として貧弱すぎるからである。そこで、今回の復原では3重虹梁臺股の構造形式を採用することにした。3重虹梁というと、突飛な発想だと思われるかもしれないが、『年中行事絵巻』にみえる建礼門は3重虹梁、待賢門は4重虹梁を妻飾りとしており、『信貴山縁起絵巻』にみえる内裏東門の妻飾りも4重虹梁に描かれている。すなわち、少なくとも平安時代においては、宮中の門の妻飾りに3重虹梁もしくは4重虹梁を採用していたわけで、平城宮大極殿院閤門脇の楼阁が3重虹梁臺股形式だとしても、さほど不自然ではなからう。

SB7802は基壇の出が8尺に確定しており、軒は二軒で出が8.7尺、組物は平三斗に復原した。なお、この楼阁は楽台もしくは望楼のような機能が推定されるため、2階の正面・背面をいずれも開放とし、両側面3間すべてを白壁と推定した。

築地回廊 SC5500・5600・8098 南面築地回廊 SC5600東半では、柱の礎石据付け遺構がよく残っている。桁行方向の柱間寸法は、連続する15間が15.5尺等間だが、閤門のとりつき部分は13.7尺と短く、隅の2間も築地心から柱心までの距離とおなじく12尺等間となる。既述のように、閤門は桁行5間とみなされるので、南面の総柱間数は41間となる。基壇幅は、掘込み地業および北縁の地覆跡などから36.6尺に復原した。回廊中央の築地は遺構が検出されていないけれども、閤門の軒高よりも回廊の棟高を低くする必要があることなどから、基底幅4尺、高さ13尺と推定した。小屋組について『平城』XIは、門に多用される三棟造を築地回廊にも応用しているが、そうすると、築地心上にのる組物が回廊を歩く人の視野におさまらない。今回の復原では、視覚上の配慮から、築地上面の両端に台輪をとおして、



第一次大極殿院東楼側面図 1:400



第一次大極殿院築地回廊断面図 1:400

閣門軒まわり詳細 1:80

柱筋位置にふたつの大斗を対称におき、柱上の大斗とのあいだに虹梁をわたす新形式を採用した。ただし、この手法も回廊隅の納まりに若干の問題がある。軒の出は7尺、二軒で組物は平三斗とした。

東面築地回廊 SC5500はわずかに基壇遺構を残すのみで、柱位置は不明である。今回の復原では、南面回廊桁行柱間の基準寸法（隅2間のみ12尺で他は15.5尺）を東面にも採用し、なおかつほぼ中央の位置に三間門（13尺+15.5尺+13尺）を設けた。これにより南面回廊と北面回廊の心々距離が座標値とほぼ一致し、東西両回廊の総柱間数は71間に復原できる（『平城』XIは基準尺=29.41cmとして72間とする）。なお、三間門は単層切妻造とし、軒の出は回廊にそろえた。遺構の残りが最もわるい北面回廊 SC8098についても、南面の基準柱間寸法を採用した。ただし、後殿への入口となる中軸線上に、東面と同規模の三間門を設けたので、後門への取り付け部分のみ、柱間寸法が15尺となる。北面の総柱間数も、南面とおなじく41間である。なお、東・西・北面では、三間門と回廊隅のほぼ中間に柱間1間の穴門も設けた。

軒廊 後殿基壇に接続する入隅部分の雨落溝痕跡から、北面回廊と後殿をつなぐ軒廊は、基壇幅が4.4m、長さが6.7mに復原できる。柱位置はわかっていないが、今回は桁行2間（10尺等間）×梁間1間（10尺）と推定した。軒の出は4尺、一軒で組物は平三斗とした。また、後殿と大極殿をつなぐ軒廊は、遺構がまったく検出されていないが、平城宮第二次大極殿では軒廊の礎石遺構が残り、『年中行事絵巻』にもその表現がみられることから、推定復原することにした。梁行の柱間寸法は、大極殿および後殿の身舎桁行柱間寸法とそろえて17尺とした。軒の出や組物は、北側の軒廊とおなじである。桁行方向は15尺×5間とし、南端の柱は大極殿基壇上面に立てたので、屋根のカーブがかなり曲率の大きなものとなった。なお、今回の復原では、大極殿一後殿間の軒廊を、大極殿背面の扉想定位置にあわせて3条設けたが、平城宮第二次大極殿のように、中央の1条のみであった可能性もある。

以上のように、今回の模型製作では、『平城』XI段階での見解をかなり大きく修正した復原を試みてみた。これから大極殿本体の10分の1スケールの模型製作をへて、建物そのものの復原へと作業は進むわけだが、100分の1スケールの模型が完成したことにより、ようやく復原の叩き台となるスタート・ラインにたどりついたといえよう。

（浅川滋男）

地形と土木施設 模型製作の範囲は東西275m、南北390mの範囲であり、仕上がりは290cm×400cmとなる。なお、模型製作範囲の約半分について、すでに発掘調査が完了している。

①地形復原の方法 当時の地形を復原するにあたっては、『平城』XIに記される第Ⅰ—Ⅱ期の遺構から標高を想定した。具体的には次の方法により行った。まず、築地回廊で囲まれている南3分の2にあたる広場地区では、礫敷面や石敷面を当時の地表面とみることができる。一方、大極殿や後殿を配する北方の殿舎地区や溝底のみが残るような削平の著しい部分では、周辺地形との整合性や排水の合理性を考慮した上で当時の地表の高さを推定した。発掘調査において、第Ⅰ—Ⅱ期の下層遺構まで発掘した部分では、土層観察用の畦からその標高を推定した。佐紀池から続く南北溝は、第28次調査でその一部を検出し、第92次調査ではその北端を検出している。その他の未発掘部分の溝肩の標高は、双方のデータから比例配分する方法をとった。さらに、築地回廊で囲まれる区域の西半部は未発掘の部分が多いので、この部分の標高については、その全容がほぼ明らかになっている東半部の成果を中軸線から対称におりかえし、復原した。

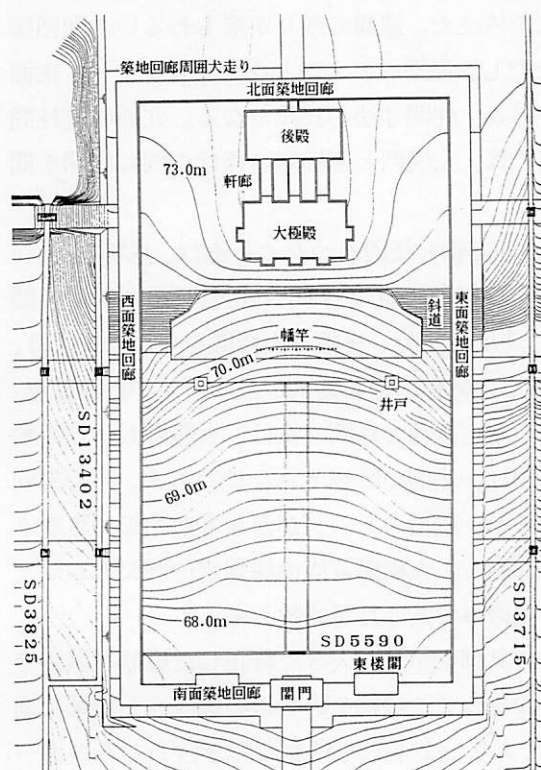
②殿舎地区の地形 後殿が位置する地盤を最高地点とし、斜道方向に向かって穏やかに傾斜する平場を想定した。

③斜道 SF9232A 斜道は南面する塙積擁壁の位置にその上端を合わせ、比高2.1m、長さ31.7m、勾配6.6%とした。斜面の舗装には方塙を想定した。なお東西両面の築地回廊は斜道に合わせて基壇の勾配を変えている。

④広場地区の地形 地形は全体には北から南へ緩やかに傾斜するが、雨水は中央部以北では中軸線に向かって集まり、南端部で東西の築地回廊隅から外に排出され则认为した。

⑤築地回廊周囲犬走り 築地回廊の外側には、回廊幅の約半分にあたる17尺の通路状の平場を設けた。

⑥南北溝 SD13402 南北溝 SD13402と対称の位置にある東外郭の南北溝 SD3765は、朝堂院の北を限る塙 SA5551の増設により埋め立てられるが、SD13402はその後も存続するため、南端は南面築地回廊



復原地形図 1:4000

基壇北縁に平行する暗渠排水を受けて、西に方向を変えるものと推定した。北端は佐紀池南堤とした。

⑦南北溝 SD3825 第28次調査で検出した南北溝 SD3825をそのまま北へ延長すると、第92次調査で検出した南北溝 SD8198とは約1.5mのずれを生ずる。したがって、SD3825は途中でやや方向を変えるものと想定した。

⑧佐紀池南堤 平城宮西面北門から東に伸びる道路を幅員12mで回廊周囲を巡る犬走りまで延長し、佐紀池の南堤と兼用する構造を考えた。南北溝 SD3825との交差部分には開渠を想定し、そこに高欄付き平橋を設けた。

⑨佐紀池の堰 SX8192 柱間16尺で、堰板を差し込む構造とした。堰板の天端は佐紀池の水面高で、標高69.7mである。堰に近い池岸にはしがらみによる直線状の土留めを設けた。

⑩植栽 樹種及びその位置は根拠に乏しいが、回廊の外側に常緑樹と松を配した。(内田和伸)